

## 「平和の祈り—み顔を向ける神」

### 民数記 6章22～27節

大学チャプレン 政治経済学部チャプレン 菊地 順

今日からシリーズ説教が始まります。今年のテーマは、「平和の祈り」です。改めて申し上げるまでもなく、今年は戦後 70 年目の節目の年です。そのことを覚えて、今年のテーマは「平和の祈り」となりました。そして、今日が、その第 1 回目の礼拝です。

わたしが平和を考える中で与えられた聖書の箇所は、先ほど読んでいただきました民数記第 6 章 22 節から 27 節の言葉です。普段、この全学礼拝で民数記が読まれることはほとんどありません。教会でもそうです。しかし、今日の民数記の箇所は、民数記の中では、多分一番よく知られているところではないかと思います。それは、今日の聖書箇所の 24 節から 26 節までの祈りは、礼拝の最後の祝福の祈りの中で祈られることが多いからです。それは、キリスト教の礼拝だけではなくユダヤ教の礼拝においても同じです。礼拝を締め括る祝福の祈りとして、この聖書の箇所が祈られます。そのため、この祈りは、「祝福の祈り」とも「アロンの祈り」とも呼ばれています。祭司アロンが、この祈りを持ってイスラエルの民を祝福したからです。そのため、この祈りはかなり昔から大切な祈りとして守られてきました。紀元前 600 年ごろのお墓から出土した銀製の円筒の筒に、この祈りが記されていたという報告もあります。そこで、改めて、もう一度この祈りのところを読んでみたいと思います。

「主があなたを祝福し、あなたを守られるように。

主が御顔を向けてあなたを照らし／あなたに恵みを与えられるように。

主が御顔をあなたに向けて／あなたに平安を賜るように。」

「主」とは神のことです。「あなた」とはイスラエルの民のことです。神がその民イスラエルを祝福されるようにという祈りです。この祈りは、ご覧のように、3 つの部分からできていますが、最初の祈りよりも、第 2、第 3 の祈りの方が言葉が膨らみ、神の恵みが大きく、広く、満ち溢れて行く印象を受けます。そして、第 2、第 3 の祈りには、神が「御顔を向けて」イスラエルの民を祝福すると語られています。神が御顔を向けて下さるということです。これは、実に驚くべきこと、そしてまた、通常感覚からすると考えられないことでした。というのも、罪深い人間は、神の顔を見ると滅ぼされてしまうと考えられていたからです。預言者のイザヤは、神の臨在に触れたとき、こう叫びました。「災いだ。わたしは滅ぼされる。わたしは汚れた唇の者。汚れた唇の民の中に住む者。しかも、わたしの目は／王なる万軍の主を仰ぎ見た」(イザヤ書 6:4)。神を仰ぎ見たイザヤは、「わたしは滅ぼされる」と叫んだのです。それが、汚れた唇の中にいる者、罪の中にいる者の率直な思いであったのです。また預言者エゼキエルは、偶像に仕えたイスラエルの民に向かって、神は「顔と顔を合わせて、あなたがたをさばく」(20:35)と語っています。それは、神は、義なる方、正義の方であるからです。そして、義であり正義である神は、そ

れゆえにまた裁かれる方でもあるからです。罪の中にいる人間を厳しく裁く方、それが神なのです。ですから、その神が、その御顔を向けられるというのは、本来は恐ろしいことなのです。それこそ、滅ぼされるばかりのことなのです。

それでは、なぜ民数記では、神が御顔を向けることは、祝福だと言うのでしょうか。しかも、神は御顔を向けて照らして下さるとも言うのです。怒りの顔ではなく、いわば太陽が輝くように輝き、イスラエルの民を照らして下さると言うのです。そこには、人間の罪にもまさる神の愛があるとも言えるかもしれません。あるいは、正しいものにだけ、神は御顔を向けて下さるとのことかもしれません。確かに、そうかもしれません。この民数記には、この祝福の祈りに先立って、イスラエルの民が守るべき掟が語られています。ですから、それを守るイスラエルの民に、祝福の言葉が語られているとも言えます。しかし、それだけではないと思います。というのも、「御顔を向ける」という言葉ですが、この「向ける」と訳されている言葉は、実は「上げる」という言葉だからです。神は御顔を上げて祝福されるというのです。これは、通常の用い方とは異なります。通常では、目下のものが目上の者に顔を上げるのです。見上げるのです。しかし、ここでは、人間の上にいる神が顔を上げるというのです。そのため、それは単に、目下の者が顔を上げるといった意味ではありません。そうではなく、顔を下げ、顔を伏せるという言葉の反対語として顔を上げると言われているのです。そして、顔を下げるとは、怒りとか悲しみを表わす表現ですから、その逆である「顔を上げる」とは、その怒りとか悲しみを超えて顔を上げるということなのです。神は、怒りや悲しみから御顔を上げて、その民イスラエルに御顔を向けられ、祝福されるというのです。すなわち、人間の罪にもかかわらず、神は赦しと和らぎを持って、御顔を上げて下さるのです。そして、御顔を向けて下さるのです。だからこそ、イスラエルの民は、神の御顔に照らされて、その祝福に与ることができるのです。すなわち、そこに、神の大きい愛があるのです。

そうだとすれば、そこには、イエス・キリストに示された神の大きい憐みがあるとも言えるのではないかと思います。神の独り子であるイエス・キリストは、わたしたちの身代わりとなってわたしたちの罪を担い、十字架につけられました。しかし、神は、そのイエス・キリストを死人の中からよみがえらせることによって、罪の赦しを与えられました。そうした贖いの恵みを、神はイエス・キリストをとおして与えられたのです。それは、何よりも、神ご自身が愛に満ちた方であるからです。確かに、神は、義なる方です。それゆえに裁く方です。しかし、それは人間を滅ぼすためではなく、人間を祝福するためなのです。罪の中にいる人間を神へと立ち返らせるために、時に、神は厳しく裁かれるのです。しかし、滅びではなく、キリストの贖いの恵みをとおして裁かれ、御自身へと立ち返るよう招かれるのです。そこに、神の愛があるのです。そして、その愛が、この民数記の「祝福の祈り」にも貫かれているのです。

ですから、大切なことは、この愛に満ちた祈りに励まされて、神へと立ち返ることなのです。悔い改めを持って、立ち返ることなのです。祝福の祈りが祈られているから、何もしないでいいということではないのです。そうではなく、この祈りに励まされて神に立ち返り、悔い改めを持って神の御顔を仰ぎ見ることなのです。そして、神と人間との究極のあるべき姿は、このようにして顔と顔を合わせて相見ることでもあるのです。パウロは、そのことを、完全なものが到来したときに起こることとして、こう語っています。「わたしたちは、今は、鏡におぼろげに映ったものを見ている。だがそのときには、顔と顔を合わせて見ることになる」と。神の救いが完成するとき、わたしたちは顔と顔を合わせてはっきりと見るのです。そうした完成へとわたしたちは招かれているのです。そして、そこにこそ、神の平安、シャロー

ムがあるのです。

確かに、神の御顔というとき、それはあくまでも象徴的な表現です。すべてを超越している神に具体的な形はありません。しかし、聖書は、神を人格として捉えています。人間に対峙し、応答し、言葉を持って交わられる神を語ります。そうした人格としての神を語るとき、その人格を具体的に表わすものとしてふさわしいのは、やはり「顔」ではないでしょうか。そして、それは、わたしたち人間の間においても同じではないでしょうか。わたしたちも、一人ひとり人格を持つものとして顔が重要なのです。そして、顔と顔とを合わせてお互いを見ることが大切なのです。お互いを見、お互いの存在を受け入れ、穏やかな心で顔を合わせることが大切なのです。そして、そこにこそ、平和があるのです。逆に、顔と顔を合わせることができないとき、目と目を合わせることができないとき、そこにある人間関係は、不健全なものになっているのではないのでしょうか。そして、時には、敵対関係にすらなっているのではないのでしょうか。今の時代は、携帯があり、スマホがあり、インターネットがあり、便利な時代ですが、その分、顔と顔を合わせることが少なくなってきました。そして、そのことが、時には深い人間不信にもつながっているのではないのでしょうか。そのことを思いますと、顔と顔を合わせるということは、一層大切なことのように思います。そして、人と人との平和な関係を築くためには、もう一歩踏み込んで、神との平和な関係を築くことが大切なのです。何よりも、わたしたちに先立って、わたしたちに赦しを持って御顔を向けて下さる神に、わたしたちも悔い改めを持って顔を上げ、神を見上げることなのです。そして、そこにある平安に包まれて、お互いの顔を向け合うとき、この地上に平和がもたらされていくのです。

わたしたちは、わたしたちの罪にもかかわらず、わたしたちに御顔を向けて下さる神に信頼し、悔い改めを持って神を見上げ、顔と顔を合わせる者になって行きたいと思います。そして、家庭でも、大学でも、社会でも、そして国際関係においても、互いに顔と顔を合わせる中であって、平和を作り出す者になって行きたいと思います。

2015年10月13日 聖学院大学 全学礼拝（シリーズ礼拝）